國學院大學學術情報リポジトリ

『古事記』訓読文に見る他動詞「す」のヲ格賓語のヲ格表出・非表出について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000934

『古事記』訓読文に見る

他動詞「す」のヲ格賓語のヲ格表出・非表出について

中村 幸弘

キーワード：他動詞「す」のヲ格賓語、ヲ格の表出・非表出、表出・非表出の揺れ、「為」字訓読の「す」と補読の「す」と、『古事記』原漢文の構文と訓読

第一章 小稿の問題点の所在

―原漢文とヲ格表出^①・非表出との関係

『古事記』訓読文に現れる、ヲ格の賓語^②を必須とする他動詞「す」を観察したとき、原漢文において「為」字が当てられている「す」と、訓読に際して補読されることになった「す」との、二類の「す」の存在が確認される。また、そのヲ格の賓語を必須とする他動詞「す」の、その賓語については、その格助詞「を」を表出している用例群と、表出していない用例群との、二群の存在が、併せて確認され

る。

ただ、そのヲ格を表出した格助詞「を」もまた、補読である。その「を」に相当する漢字が存在するわけではないからである。そこで、その動詞「す」を「為」字で表記してある用例群の構文に注目したとき、そのすべてが、その賓語を「為」字の直下に置いていることに気づかされる。

ヲ格賓語を返り点で認知していく構文である。そのうちのなにがしかは、格助詞「を」を補読して、そのヲ格を表出しているが、すべてがそうであるわけではなく、ヲ格非表出の用例も見られたのである。

一方、訓読に際して、「為」字がないのに、動詞「す」を用いて訓読している用例に注目したとき、当然のことながら、そこに、格助詞「を」を添えて読む用例を見ることが

はまったくなかった。それらは、多くが、動詞連用形が名詞化する過程にあるかに見える連用形名詞に動詞「す」が直接について、複合動詞として認定できなくもなく、全用例とも、その語幹相当の名詞の下にヲ格が読みとれる用例である。用例は限られるが、その賓語となる名詞が、動詞連用形に本来の名詞が熟合した複合名詞である用例もあって、これらもまた、語幹相当の名詞の下にヲ格が読みとれる複合動詞相当語である。その取り扱いを一語の複合動詞と認定してよいかどうか、それはともかくとしても、その末尾に非表出のヲ格を読みとっていくことのできる名詞に直結する「す」が存在するのである。

そもそも、「す」が補読されることを前提にした原漢文は、どういう意識で執筆されていたのであろうか。「為」字を用いた原漢文は、「す」を補読させる原漢文とどれほどの違いを意識して執筆していたのであろうか。現行の訓読は、現代人の意識が関わってしまっているものではあるが、結果としてヲ格賓語を必須とする他動詞「す」がヲ格非表出のヲ格賓語に直結して用いられている用例をどう理解していったらよいのであろうか。

いま、その訓読文は、新編日本古典文学全集『古事記』に拠ることとする。以下、ヲ格表出が顕著な用例群の検出から、表出・非表出で揺れている用例の対照化、さらに、ヲ格非表出が定着している用例群の整理などへと、順次、確認したうえで、他動詞「す」についての、当代人の意識などについて読みとるよう努めてみたいと思う。

第二章 連体修飾語を冠したヲ格賓語のヲ格表出五用例

その原漢文が、「為」 というように凶解される用例群である。以下に、その該当用例を紹介する。

(1) 詔はく、「故、吾は、御身の襖を為む」とのりたまひて、…。(上巻・伊邪那岐命と…/四九・15)

〈…故、吾者、為御身の襖一而、…。〉

(2) 其の父に白して言ひしく、「…恒は歎くこと無きに、今夜大き一つの歎きを為つ。…」といひき。(上巻・日子穗々手見命と…/一三〇・2)

〈…今夜為一大一嘆一。〉

(3) 其の聳夫を問ひて曰ひしく、「…恒は歎くこと無

きに、今夜^{こよひ}大き^{おほ}歎^{なげ}きを^ヲ為^ラつ』…。(上巻・日子穗々
手見命と…／一三二・二)

〈…今夜^{こよひ}為^ラ大^{おほ}嘆^{なげ}。〉

(4) 是^{こゝ}に、「御室^{みむろ}の樂^らを^ヲ為^ラむ」と言^いひ動^{とよ}みて、食^{くら}物^{ひもの}を^ヲ設^まけ備^{そな}
へき。(中巻・景行天皇／二一九・二)

〈…言^い動^{とよ}為^ラ御室^{みむろ}樂^ら、…〉

(5) …更^{さら}に國^{くに}の大^{おほ}め^さを取りて、…罪^{つみ}の類^{たぐひ}を^ヲ求^{もと}めて、國^{くに}の大^{おほ}
祓^{はら}を^ヲ為^ラて、…。(中巻・仲哀天皇／二四五・五)

〈…為^ラ國^{くに}之大^{おほ}祓^{はら}一而、…〉

右のいずれの用例も、ヲ格賓語が連体修飾語を冠してい
て、そのヲ格賓語を必須とする他動詞「す」が、原漢文に
おいて、「為」字を用いて書き表されている。このような
構文の箇所においては、そのヲ格が格助詞「を」として表
出される傾向が顕著であった、と見てよいであろう。

その傾向を証明するために、(1)の用例のヲ格賓語の核と
いえる「祓」だけをヲ格賓語とする用例との比較を以下に
試みることにする。漢字表記は異なるが、「みそぎ」以外
の訓みは考えられない用例である。そこには、「為」字が
用いられていないのである。

○…竺紫^{つくし}の日向^{ひむか}の橘^{なつばな}の小門^{せと}のあはぎ原^{はら}に到^{いた}り坐^まして、祓^{はら}
祓^{はら}しき。(上巻・伊耶那岐命と…／四九・17)

〈…祓祓也。〉

ところが、その〈みそぎ〉を、「為」字を用いてヲ格賓
語としている用例もあったのである。ここでは、その構文
を尊重して、ヲ格を表出して格助詞「を」を補読してきて
いる。

○…詔^{のたま}ひしく、「今日^{けふ}は此間^{こゝ}に留^{とど}まりて、祓祓^{はら}を^ヲ為^ラて、…」。

(下巻・履中天皇／三二四・二)

〈…為^ラ祓祓一而、…〉

まさに、その書き表し方が揺れている用例かに見えてき
てしまうのであるが、その事情については、追って、章を
改めて取り立てることとする。いま、本章においては、(1)
の用例についても、(2)・(3)・(4)・(5)の他の四用例と併せて、
連体修飾語を冠したヲ格賓語が現れた場合には、「為」を
用いて、「為」 「 」構文として書き表そうとして
いた姿勢を読みとっていきたいと思う。

そうではあるが、実は、一用例、(4)の用例と同じヲ格賓
語で、そのヲ格賓語を受ける「す」に「為」字を用いてい

ない用例があったのである。

○…其の国の人民、名は志自牟が新室の樂^せるに到りぬ。

(下巻・清寧天皇／三五六・3)

〈…到^ま其国之人民、名志自牟之新室樂^せ。〉

同じ「新室の樂」が、ヲ格を表出して読まれる(4)の用例との違いは、原漢文に「為」字が用いられていたかどうかの違いである。この用例の事情についても、追って、章を改めて取り立てることとする。

第三章 ヲ格實語のヲ格表出が定着している見たい五用例

ある意味では連体修飾語を冠している語句と見てもよい複合名詞「豊樂^{とよのあかり}」「豊明^{とよのあかり}」は、その、ヲ格實語のヲ格表出が定着している見たい用例である。その「豊樂」「豊明」の語義は、もちろん、〈酒を飲んで催す饗宴〉を指しているものであって、〈酒などを飲んで顔が赤らむこと〉をいうそれではない。その「豊^{とよ}」は造語成分と見てよく、「豊秋津島^{あきつしま}」「豊葦原^{とよあしはら}」「豊籬雲^{とよみさぐも}」「豊御酒^{とよみみ}」などの諸用例から見て「豊樂^{とよあかり}」「豊明^{とよあかり}」でよいのではないかとも思えるが、その問題は、いまはこゝまでとする。

(6) …將に豊樂^{とよのあかり}を^せむとする時に、…。(下巻・仁徳天皇

／三〇二・2)

〈…將^{まさ}為^な豊樂^{とよのあかり}一之時、…。〉

(7) …大嘗に坐して、豊明^{とよのあかり}を^せ為^なし時に、…。(下巻・履中

天皇／三〇七・8)

〈…為^な豊明^{とよのあかり}一之時、…。〉

(8) …忽ち豊樂^{とよのあかり}を^せ為^なて、…。(下巻・履中天皇／三二三・

4)

〈…忽^{たちま}為^な豊樂^{とよのあかり}一、…。〉

(9) 又、天皇、長谷の百枝槻の下に坐して、豊樂^{とよのあかり}を^せ為^なし時に、

…。(下巻・雄略天皇／三五〇・2)

〈…為^な豊樂^{とよのあかり}一之時、…。〉

そうではあるが、実は、この「豊樂」にも、「為」字を用いないで、「す」を補読する用例を見るのである。しかも、二用例見るのであるが、ただ、その二用例とも、まったく同じ構文のところである。

○大后、豊樂^{とよのあかり}を^せむと為て、…。(下巻・仁徳天皇／

二九一・15)

〈…大后、為^な將^{まさ}豊樂^{とよのあかり}一而、…。〉

○天皇、豊樂^{（上巻）}せむと為て、…。（下巻・仁徳天皇／三〇三・

9）

〈…天皇、為^レ将^二豊樂^一而、…〉

これら用例の事情についても、追って、章を改めて取り立てることとする。

さて、連体格助詞「の」を用いて熟合した複合名詞と見てよい名詞を賓語とする用例として、次の一用例が存在した。次章の孤例グループの一用例でもある。

(10) …伊邪那伎命の詔^{（のたま）}ひしく、「…みとのまぐはひを^ヲ為^セむ」
とのりたまひき。（上巻・伊邪那伎命と…／三三二・5）

〈…^ヲ為^レ美斗能麻具波比^一。此七字
以音〉

その賓語、相当する正訓字がないからであるうか、すべて万葉仮名で表記されている。ヲ格を表出して訓むかどうかはともかく、ここに「為」字は必須であったろう。

第四章 ヲ格賓語のヲ格を表出した孤例九用例

ここに紹介しようとする用例は、そのヲ格賓語となる名詞がそのヲ格賓語としてはその一用例に限られる用例である。孤例といえる用例が、五用例存在する。以下に、紹介

する。

(11) …次に、「思金神は、前の事を取り持ちて政を^ヲ為^セよ」
とのりたまひき。（上巻・忍穗耳命と…／一一六・2）

〈…次思金神者、取^二持前事^一為^レ政。〉

(12) 其の建御名方神、…言ひしく「力競^{（ちからくら）}べを^ヲ為^セむと欲^{（お）}ふ。…」
といひき。（上巻・忍穗耳命と…／一〇九・12）

〈…欲^レ為^レ力競^一。…〉

(13) …唯^{（ただ）}に其の弟木花之佐久夜毘売のみを留^{（とど）}めて、一夜、婚^{（む）}
を^ヲ為^シき。（上巻・忍穗耳命と…／一一一・14）

〈…一夜、為^レ婚。〉

(14) …海の神、…御饗を^ヲ為^シて、即ち其の女豊玉売に婚はし
めき。（上巻・日子穗々手見命と…／一二九・13）

〈…^ヲ為^レ御饗^一、…〉

(15) …天皇の答へて白^{（ま）}さく、「…」とまをして、詐^{（いかり）}を^ヲ為^シる神
と謂^{（おも）}ひて、…。（中巻・仲哀天皇／二四三・10）

〈…謂^レ為^レ詐神^一而、…〉

(16) …香坂王、忍熊王、聞きて、待ち取らむと思ひて、斗賀^{（とが）}
野に進み出でて、うけひ獨^{（が）}を^ヲ為^シき。（中巻・仲哀天皇／
二五〇・1）

〈…為「字氣比藪」也。〉

(17) …口鼓を撃ちて、技を為て、歌ひて曰はく、…。(中巻・

応神天皇／二六〇・八)

〈…為「技而、…」〉

(18) …其の兄の曰はく、「…亦、山河の物を悉く備へ設けて、

うれづくを為む」と、云ふこと爾り。(中巻・応神天

皇／二七九・10)

〈…為「字礼豆玖」、云爾。自字至玖似〉

(19) …答へて曰ひしく、「…故、吾、先づ名告を為む。…」

といひき。(下巻・雄略天皇／三四八・3)

〈…故、吾、先為「名告」〉

(11)の「政」、(13)の「婚」、(15)の「詐」、(17)の「技」は、い
ずれも、漢字一字名詞で、したがって、レ点で「為」字に
返ることになる。さらに、(13)の「婚」と(15)「詐」とは、連
用形名詞である。殊に、「婚」については、追って取り上
げる「御合」が、「為」字を用いていないのに、動詞「す」
を直接させて補読する用例を見せたり、「為」字を用いて
いるのに、ヲ格を表出しないう用例を見せたりするので、敬
語接頭語「御」を冠していないこの「婚」が「為」字を用

いて表現されていることに、その事情のほどが知りたくな
るのである。また、(17)の「技」だけが、非連用形の本来の
名詞である。

(16)「うけひ藪」は、〈成否・吉凶を占うための狩り〉を
いう名詞で、「うけひ」の部分は、万葉仮名表記されている。
(18)の「うれづく」は、〈賭けごと〉の意かとされる名詞で、
すべて万葉仮名表記されている。(12)「力競べ」と(19)「名告」
とは、漢字二字から成る一語であるが、追って、そのよう
な類例で、「為」字を用いることなく、動詞「す」を直接
させて補読していく用例を一方に見るのである。

以上に見るように、そこに「為」字を用いる決定的な理
由を読みとることはできていないが、そのヲ格賓語となる
名詞が孤例であるところから、ヲ格表出に表現の姿勢が影
響しているかに思える用例の存在が見えてくるのである。
(12)・(18)・(19)に共通するのは、ともに意志の表現で、意志の
助動詞「む」を伴っている。前章の(10)を含めると、四用例
ということになる。ただ、第三章において、ヲ格表出が定
着していると思いたい「豊楽」とよのあかり「豊明」とよのあかりに注目した際、その
「豊楽」をヲ格賓語としながらヲ格非表出となっていた違

例の二用例は、その他動詞「す」が意志の表現「…せむと為て、」を伴っていたのであった。「…せむと為」となると、事情が違うことになるようである。とにかく、ヲ格表出・非表出の手掛かりとしては、しばらく見送らなければならぬようである。

第五章 ヲ格賓語のヲ格の表出・非表出で揺れている三組の用例（計六用例）

その一組として取り上げるのは、既に第二章において触れてきてしまっている三用例である。そのうちの二用例は、第二章の(1)の用例で、その用例については、連体修飾語を冠しているところから、ヲ格賓語であることを明確に表現するための「為」字を用いた、その結果としてのヲ格表出の格助詞「を」の補読であった、と見たいと思うこと、既に述べてきている。そこで、残る二用例を、以下に引くこととする。

(20) ……竺紫つくしの日向ひむかの橋たはなの小門をどのあはき原はらに到いたり坐まして、禊祓みそぎ

しき。(上卷・伊耶那岐命と…／四九・17)
…伊耶那岐大神詔、…故、吾者、為_二御身之禊_一而、到

…坐竺紫日向之橋小門之阿波岐此三字原_一而、禊祓也。)

(21) 詔のたまひしく、「今日けふは此間こゝに留とどまりて、祓禊みそぎを為なして、…」。

(下卷・履中天皇／三一四・2)

…今日留_二此間_一、為_二祓禊_一而、明日参出、将_レ拜_二神宮_一。

(20)は、伊耶那岐大神が、「…吾は、御身の禊を為む」とおっしゃって、筑紫の日向の橋の小門のあはき原にご到着になって、禊祓をした、というのである。その「禊祓也」は、主語「伊耶那岐大神」に應じている述語であって、そこで動詞として訓まれることが読みとれる構文である。したがって、その訓読した「禊祓しき。」の「禊祓す」は、ヲ格賓語を語幹とするサ行変格活用_のの複合動詞と見ることができであろう。そうではあるが、「為_二禊祓_一也。」と書き表してはならない理由はどこにあるのであろうか。

(21)は、水齒_{みずは}別命_{わけのみこと}の会話文に相当する部分の用例で、今日はここに泊まって禊をして、明日参上して神宮を拝礼しよう、と、隼人に言っているところである。この「為_二禊祓_一而、」の部分、「禊祓」だけでも「禊祓而」であっても、いずれでもよいように思えてくる文脈のところであ

る。そうではあるが、(20)は、文末の「也」字の存在からは、「為」字がないほうが穏やかにも見えてくる。(21)も、直上の「留^三此間^一、」も含めて「為^三祓禊^一而^一、」の「而」字で小休止しようとするのも、理解できなくはないのである。そして、この(20)・(21)については、〈みそぎ〉を「禊祓」と表記するか「祓禊」と表記するかが関わっているであろうか。その点について触れた論考など、ないのであるか。

次の一組は、ヲ格賓語を「儻^まを」とする表現と、「儻^ま(麻比)」だけとする表現との一組である。

(22) ……其の嬢子に儻^まを^ヲ爲^セしめき。(下巻・雄略天皇／三四五・6)

〈…令^レ爲^ス儻^三其嬢子^一。〉

(23) 呉床居^{みくらゐ}の神^{かみ}の御手^{みて}もち 弾^ひく琴に 儻^まする女^{をんな} ……
(下巻・雄略天皇／三四五・8)

〈…比久許登爾 麻比須流袁美那…〉

表現として登場する順序としては、(22)・(23)であろうが、(23)は歌謡であるので、天皇がそのようにお詠みになったところから、この吉野の童女の記録となっているのであ

る。その歌謡には、連用形名詞「儻^(ひ)」に動詞「す」が直結していて、それを一字一音の万葉仮名で「麻比須流」と表記している。それは、律文としての傾向といつてしまえばそれまでのことだが、とにかく、『万葉集』においても、動詞「す」は、連用形名詞に直結した用例が圧倒的に多いのである。そして、この(23)は、その「儻^まする」が「女^{をんな}」の連体修飾語になっていて、しかも、みごとに七音節「マヒスルヲミナ」に収まっていて、ヲ格賓語を語幹とするサ行変格活用の複合動詞となっているのである。「儻^まふ女^{をんな}」ではないのである。

一方、雄略天皇が御呉床^{みくらゐ}にお座りになり、お琴を弾いて、その少女に舞を舞わせた記事においては、「令^レ爲^レ儻^三其嬢子^一。」というように書き残しているのである。しかし、その動詞と使役の助動詞との関係は、「令^レ儻^三」で十分であろう。ただ、当代日本語文としては、「其の嬢子に儻^まはしむ」では不十分さを感じたのであろうか。「儻^まを^ヲ爲^セしむ」という表現のほうが、表現として評価されるようになっていたものと理解したいとも思うのである。

(22) と (23) との両表現には、表記を含めて、それぞ

れに、その事情が読みとれよう。「令^レ儻^二其嬢子^一。」と「令^レ為^二儻^三其嬢子^一。」との違いは、表記のしかたの違いであつて、それ以上のものではないであらう。あるいは、連用形名詞に動詞「す」を直結させたサ行変格活用複合動詞「儻^レひす」を経たうえでの、表現価値の問題だったか、とも思えてくるのである。その「儻^レひす」については、その一方に、使役の表現側からの要請も見えてもよようか。

最後の二組は、ともに原漢文には「為」字があるのだが、一用例はヲ格を表出することなく訓んでおり、一用例はヲ格を表出して訓んでいるのである。

(24) : 榜^{たくなほ}繩^{ちひらなほう}の千尋繩^{ちひらなほう}打ち延^はへ釣^{つり}為^する海人^{あま}が、…。(上巻・忍穂耳命と…／一三三・3)

〈…為^レ釣海人之、…〉

(25) : …龜^{かめ}の甲^かに乗りて釣^{つり}を為^すつつ打ち羽^は挙^あり来る人^こ、速^{はや}吸門^{すひのと}に遇^あひき。(中巻・神武天皇／一四三・1)

〈…乘^二龜甲^一為^レ釣乍[…]〉

(24) では、「為^レ釣海人之、」を「釣^{つり}為^ある海人^{あま}が、」と訓んでいるのに対して、(25) では、「為^レ釣乍」を「釣^{つり}を為^あつつ」と訓んでいる。「釣^{つり}為^ある海人^{あま}」であつて、「釣^{つり}を為^あ

る海人^{あま}」でないのは、その「為^レ釣」が連体修飾語になるからであらう。加えて、『万葉集』歌の「鹿島^{かしま}なる釣^{つり}する海人^{あま}を」(⑨・一六六九)など数用例が直ちに浮かんできて、その「釣^{つり}する海人^{あま}を」などが、(24) の訓読に影響を与えているのではないかと、そう思えてくるのである。古典語文を取り扱ふ現代人の意識のなかに、とにかく、「釣^{つり}する海人^{あま}」が定着しているから、というように感じられてくる。

第六章 「為」字があるのに、ヲ格非表出の異なり十三用例(全十四用例)

原漢文が「為^レ□□」「為^レ□□」であるのに、ヲ格非表出の訓読文が意外なほどに多いことを確認しようとするのが本章である。それほどに、連用形名詞に直結した動詞を格助詞「を」によつて切り離すことは容易ではなかつたのである。「為」字があるのに、ヲ格非表出の該当用例を、以下に引いていくこととする。

(26) : …踏^ふみとどろこし、神懸^{かむか}り為^すて、胸乳^{むなち}を掛^かき出^いだし、…。(上巻・天照大御神と…／六五・13)

〈…為「神懸」而、…〉

(27) 其の女須勢理毘売出で見て、目合^{めくはせ}為^して、相婚^{あひあ}ひき。

(上卷・大国主神／八一・9)

〈…為「目合」而、…〉

(28) 故^{かれ}其の夜は合はずして、明くる日の夜に御合^{みあひ}為^しき。

(上卷・大国主神／八九・1)

〈…明日夜為「御合」也。〉

(29) 又、其の神の適后須勢理毘売命、甚^{おほほ}た嫉^{あは}妬^な為^しき。

(上卷・大国主神／八九・2)

〈…甚為「嫉妬」。〉

(30) 如此歌^{かく}ひて、即ちうきゆひ^{すなは}為^して、うながけりて…。

(上卷・大国主神／九一・11)

〈…即為「宇伎由比」以四字。而、…〉

(31) 故^{かれ}其の猿田毘古神、阿耶訶^{あざか}に坐しし時に、漁^{すなひ}為^して、

…。(上卷・忍穂耳命と／一一九・8)

〈…為「漁」而、…〉

(32) …詔^{のりたま}ひしく、「…」と、男建^{をたけ}び為^して崩^{たふ}りましき。(中卷・

神武天皇／一四五・2)

〈為「男建」而崩。〉

(33) …神倭伊波礼毘古命、儼^{たちまち}忽^ににをえ^し為^し、…。(中卷・

神武天皇／一四五・8)

〈…為「遠延」、…〉

(34) …其の後の御膝^{みひざ}を枕^{まくら}きて、御寝^{みね}為^し坐^ましき。(中卷・

垂仁天皇／一九九・6)

〈…為「御寝」坐也。〉

(35) 故、今高^ゆく往^ゆく鶴^{つる}の音^ねを聞^ききて、始^はめてあぎとひ^ひ為^しき。

(中卷・垂仁天皇／二〇五・11)

〈…始為「阿芸登比」。〉

(36) …答^{こた}へて白^{しろ}しく、「既^{すで}にねぎ^{ねぎ}為^しつ」とまをしつ。(中

卷・景行天皇／二二七・12)

〈…答白、既為「泥疑」也。〉

(37) 爾^{しか}くして、言^{こと}拳^{こぶし}為^して詔^{のりたま}はく、「…」とのりたまひて、

…。(中卷・景行天皇／二三二・9)

〈爾、為「言拳」而詔、…〉

(38) …即^{すなは}ち其地^{そのち}のなづき田^たを匍匐^{はらば}ひ廻^{めぐ}りて哭^なき、歌^{うた}為^し

て曰^{いわ}はく、…。(中卷・景行天皇／二三五・11)

〈…而哭、為「歌」曰、…〉

(39) …次に弟舞はむとする時に、詠^{うたよみ}為^なて日はく、…(下
巻・清寧天皇／三五七・7)

〈…為^レ詠日、…〉

右の十四用例は、いずれも、「為」字があるのに、ヲ格を表出しないで、ヲ格非表出のヲ格賓語に、その「為」を直接させて読んでいく用例である。そのうち、(38)・(39)は、ヲ格賓語相当部分が「歌」「詠」という別漢字ではあるが、「うたよみ」と訓んでいて同一語である。そこで、この、「為」字があるのに、ヲ格非表出の用例は、異なり用例として数えても、十三用例存在することになるのである。

もちろん、そのように整理しても、問題がないわけではない。(36)の「ねぎ為つ」の「ねぎ」は、万葉仮名で「泥疑」と表記されていて、〈懇切に行うこと〉を意味するようである。「ねぐ」という動詞から転成した連用形名詞である。その「ねぎ」には、「為」字がないのに、「ねぎす」というように、動詞「す」を補読する用例が二用例もあるのである。ともに、追って、章を改めて、併せて検討することとする。

○天皇、小確命に詔はく、「…専ら汝、ねぎ^レ教へ覚せ^レと、…。(中巻・景行天皇／二二七・8)

〈…専汝、泥疑教覚。音泥疑二字以下効也〉

○又、詔はく、「如何にかねぎ^レつる」とのりたまふに、…。

(中巻・景行天皇／二二七・12)

〈…詔、如何泥疑也、…〉

いま一用例、(37)のヲ格賓語であって語幹となっている「言挙」が、「為」字がないのに、「す」を補読して、「言挙す」として読んでいる用例が見られた。これも、追って、その原漢文の構文と訓読文との関係など、検討したいところである。

○…言^{こと}挙^{あげ}せ^しに因^よりて惑^{まど}はさえしぞ。(中巻・景行天皇／二二二・13／割り注)

〈…因^レ言^レ挙^レ見^レ惑也。〉

本章に引かれることになった各用例は、ヲ格賓語のヲ格表出に抵抗している用例というように見えてくるのである。殊に(28)の「御合」、(34)の「御寝」については、そのヲ格非表出の背景が、確かに存在するのである。接頭語「御」を冠した連用形名詞は、動詞「す」とは結びつい

ても、ヲ格表出には馴染まず、その原漢文に「為」字を用いることをも避けていたのである。その一群については、直ちに、次章として整理することとする。

第七章 「為」字がないのに、「御」を冠した連用形名詞

に「す」を補読している異なり七用例（全十五用例）

その接頭語「御」は、すべて、尊敬の意を表す敬語である。その「御」が連用形名詞に冠された熟語が、原漢文の述語部分に配された用例を一定数見ることができたのである。その動作主は、おのずから推測できるが、改めて、本章末尾で、その確認をしたいと思っている。その「御」を冠した連用形名詞は、本章の見出しに既に述べてあるように、「為」字がないのに、動詞「す」を補読して、述語としての機能を果たしている、と見ることができようである。以下に、その該当用例を引いていくこととする。

(40) ……御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、
……（上巻・伊邪那岐命と…／四七・9）

〈…拔下所御佩之十拳劍上而、…〉

(41) ……速須佐之男神、其の御佩かしせる十拳の剣を抜き、
……（上巻・天照大御神と…／七一・13）

〈…拔下所御佩之十拳劍上、…〉

(42) ……御佩かしせる十掬の剣を抜き、（上巻・忍穗耳命
と…／一〇五・10）

〈…拔下所御佩之十掬劍上、…〉

(43) 此の御子の、高木神の女、万幡豊秋津師比売命に御
合して、……（上巻・忍穗耳命と…／一一四・2）

〈御合高木神之女、万幡豊秋津師比売命、…〉

(44) 故、其の弟、御佩かしせる十拳の剣を破り、……（上巻・
日子穗々手見命と…／一二五・16）

〈…破御佩之十拳劍、…〉

(45) ……是に、天皇、患へ賜ひて、御寝しませる時に、……
（中巻・垂仁天皇／二〇六・3）

〈…御寝之時、…〉

(46) 故爾くして、御合して、其の御刀の草那去剣を以て、
……（中巻・景行天皇／二二二・4）

〈…御合而、…〉

(47) ……先に御食せし時に、其処に忘れたる御刀、……

(中巻・景行天皇／二三三・4)

〈…先御食之時、…〉

(48) …其の河の辺に御食^せし時に、…。(中巻・仲哀

天皇／二四九・7)

〈…御^二食其河辺^一之時、…〉

(49) …宇遲野の上に御立^せて、葛野を望みて、…。(中

巻・応神天皇／二六一・3)

〈…御^二立宇遲野上^一、…〉

(50) 如此御合^せて、生みし御子は、…。(中巻・応神天

皇／二六三・8)

〈如此御合、…〉

(51) 天皇、其の太后の坐せる殿戸に御立^せて、歌ひて

曰はく、…。(下巻・応神天皇／二九七・17)

〈…御^二立其太后所^レ坐殿戸^一、…〉

(52) …大御酒^をうらげて、大御寝^せき。 (下巻・履中天皇

／三〇七・9)

〈…大御寝也。〉

(53) …便ち窈かに天皇の御寝^せるを伺ひ、其の傍の大

刀を取りて、…。(中巻・安康天皇／三三〇・3)

〈…便窈伺^二天皇之御寝^一、…〉

(54) 即ち、阿岐豆野に幸して、御獮^せし時に、…。(下巻

雄略天皇／三四五・10)

〈…御獮之時、…〉

右に検出した用例のうち、(52) は、その接頭語「御^み

の上に、さらに接頭語「大^{おほ}」が冠せられていて、その「大

御^み」が連用形名詞「寝^ね」に冠せられている用例である。履

中天皇が難波宮にいらっしゃった時、新嘗祭をなさって酒

宴を催した時、天皇はお酒に酔って気分をよくして、おや

すみになった、というところである。この「大御」を冠し

た用例も、ここに併せて整理しておく。

同じ動作を表しているものが多く、(40)・(41)・(42)・

(44) が「御佩^みかす」、(43)・(46)・(50) が「御合^みす」、(45)・

(46) が「御寝^みす」、(47)・(48) が「御食^みす」、(49)・(51)

が「御立^みす」ということで、異なり用例としては、七用例、

ということになる。そして、その全十五用例とも、その動

作主は、天皇に相当したり準じたりする神々か天皇かであ

る。

『古事記』原漢文に見るその「御」字を冠している動詞

連用形は、「御」字を冠しているところからも、名詞として認識される。その「御」を冠した連用形名詞が原漢文において意味上の述語として位置づけられているところから、動詞「す」が補読されることになるのであろう。そこで、これら「御＋連用形名詞＋「す」」は、原漢文執筆段階から、ヲ格非表出の一語の尊敬語動詞と意識されていたかに感じとれてくるのである。

第八章 「為」字がないのに、「御」を冠した連用形名詞

以外の名詞にも「す」を補読している異なり十用例（全十七用例）

前章と同じく、原漢文に「為」字が用いられていなくても、述語に相当する部分に動作を表現することが可能な語が配されている場合、それら各語には動詞「す」が補読されて、それら各語とも動詞として機能していたものと判断される。結果として、その述語部分にあった語が名詞として認識され、続いて、「す」を添えた複合動詞として認識

されてくるのである。本章で取り上げる他動詞「す」の補読用例を紹介することで、『古事記』訓読文に現れる他動詞「為」「す」のすべてを取り上げたことになる。以下に、「為」字がないのに、「御」を冠した連用形名詞以外の名詞に「す」が補読されている用例を引いていくこととする。

(55) 即ち、阿礼に 勅語して、帝皇日継と先代旧辞とを誦み習はしめたまひき。(上巻・序／二三・一)

(56) ……意の況の解り易きは、更に注せす。(上巻・序／二五・六)

(57) 亦、天皇、その後に命詔して言ひしく、「…」といひき。(中巻・垂仁天皇／二〇三・13)

(58) ……命詔其后、…。

(59) 是に、覆奏して言ひしく、「…」といひき。(中巻・垂仁天皇／二〇九・12)

又、命詔、…。

又、命詔せしく、「…」とみことのりき。(中巻・垂仁天皇／二〇三・17)

又、命詔、…。

是に、覆奏して言ひしく、「…」といひき。(中巻・垂仁天皇／二〇九・12)

又、命詔、…。

是に、覆奏して言ひしく、「…」といひき。(中巻・垂仁天皇／二〇九・12)

又、命詔、…。

〔…覆奏言、…〕

(60) 天皇 小碓命に詔はく、「…専ら汝、ねぎし教へ覺せ」と、…。(中卷・景行天皇／二二七・8)

〔…専汝、泥疑教覺。泥疑二字以〕

(61) 又詔はく、「如何にかねぎしつる」とのりたまふに、…。(中卷・景行天皇／二二七・12)

〔…詔、如何泥疑之、…〕

(62) 言拳せしに因りて惑はさえしぞ。(中卷・景行天皇／二三一・13／割り注)

〔因言拳一見惑也。〕

(63) 此の沼の辺に、一の賤しき女、昼寝せり。(中卷・応神天皇／二七五・5)

〔…一賤女、昼寝。〕

(64) 故、是の女人、其の昼寝せし時より、…。(中卷・応神天皇／二七五・8)

〔…自其昼寝時、…〕

(65) 其の太后石之日売命は、嫉妬すること甚多し。(下卷・仁徳天皇／二八九・1)

〔…甚多嫉妬。〕

(66) 言立つれば、足もあがかに嫉妬しき。(中卷・仁徳天皇／二八九・4)

〔…足母阿賀迦邇嫉妬。〕

(67) …太后、豊樂せむと為て、…。(下卷・仁徳天皇／二九一・15)

〔…太后、為レ将豊樂一而、…〕

(68) …氏々の女等、皆朝参しき。(下卷・仁徳天皇／三〇二・3)

〔…氏々之女等、皆朝参。〕

(69) …天皇、豊樂せむと為て、…。(下卷・仁徳天皇／三〇三・9)

〔天皇、為レ将豊樂一而、…〕

(70) 此より以後に、天皇、神牀に坐して、昼寝しき。(下卷・安康天皇／三二九・10)

〔…坐神牀一而、昼寝。〕

(71) …其の国の人民、名は志自牟が新室の樂せるに到りぬ。(下卷・清寧天皇／三五六・3)

〔…到其国之人民、名志自牟之新室樂一。〕

全十七用例が引かれることになったが、既に各章におい

て表記の異同確認などのために触れてきている用例が六用例も含まれている。第二章において引いた(71)の一用例、第三章において引いた(67)・(69)の二用例、第六章において引いた(60)・(61)・(62)の三用例の、都合六用例である。また、(58)には、会話文の前に予告した「命詔せしく、」にに応じて、会話文の後の結びとして「(と) みことのりしき。」が繰り返される。もちろん、その繰り返された「(と) みことのりしき。」については、用例数には含まないこととした。

本章の用例には、同一語が多い。(55)の「勅語して、」と(57)・(58)の「勅語して、」「命詔せしく、」とは、原漢文の漢字表記は異なるが、訓読した結果としては、「みことのりす」という同一語と見ることができる。(60)・(61)は、「ねぎす」という同一語である。この二用例が、第六章で触れてきた(36)においてヲ格表出をした用例に対する、ヲ格を表出しない用例である。さらに、(63)・(64)・(70)は、「昼寝す」という同一語である。(65)・(47)も、「嫉妬す」という同一語であり、(67)・(69)も、第三章で併せて引いた「豊樂す」という同一語である。以上の五

組については、異なり用例数を五用例として捉えてよいことになる。七用例は、重複用例である。その結果として、本章に該当する異なり用例数は、十用例ということになる。

第九章 第二・三・五・六章において疑問を残してきている用例の検討

第二章において、連体修飾語を冠したヲ格賓語は、ヲ格表出が顕著であると見てきていて、そうであっていいのに、ヲ格非表出の用例が一例見られた。止むなく、第八章の(71)として、そこに所属させた一用例である。その原漢文は、本来、次のように表現されるところであったのではないかと、いま愚考している。

○：山部連小盾、：到下其国之人民、名志自牟之為_二新室之樂_一所上。

ところが、一文の主語「山部連小盾」に應じる述語「到」が述べられてしまったので、以下の記述には二格の補充成分だけが意識されて、その「為」「所」字が意識されなくなってしまうのではないか、と思えてくるのである。そのように「為」字がないところからヲ格非表出ともなったので

あろうかと愚考するのである。

× × × ×

第三章において、ヲ格賓語のヲ格表出が定着している
と見たい「豊樂」^{とよのあかり}であるのに、ヲ格非表出となっている二用
例もあって、第八章の(67)・(69)として、そこに所属さ
せることになった。この二用例は、ともに、「…むと為^して、
という意志の表現に続いている。その一文に、ヲ格表出を
決定づける「為」字を用いると、一文に「為」字が二重用
いられることになってしまおう。

(67) ……太后、為^レ將^レ為^レ豊樂一而、…。

(68) ……天皇、為^レ將^レ為^レ豊樂一而、…。

もはや、そこに、「為」字を用いることが避けられた結果、
その訓読においても、ヲ格非表出となったことは容易に推
測することができるであろう。

× × × ×

第五章の、ヲ格賓語のヲ格の表出・非表出で揺れている
三組の六用例(20)・(21) / (22)・(23) / (24)・(25)につ
いては、その章において、一定の検討を試みた。なお、不
明なところもあるが、現段階では、それ以上に見えてくる

ところがないことを確認して、とどめることとする。

× × × ×

第六章の、「為」字があるのに、ヲ格非表出となる用例
のうち、(28)「御合」・(34)「御寝」については、次章の
第七章の各用例の存在が、直ちに、その理由説明となつて
いる。その第六章で注目しなければならぬのは、(36)
の「ねぎ為^つ」である。その「為」字がある「ねぎ為^つ」と、
第八章の(60)・(61)の「ねぎ」との、つまりは、原漢
文の「為」字の有無の違いである。述語動詞として位置す
る万葉仮名「泥疑」だったが、多くの述語動詞が正訓表記
語で、「す」を補読するのに倣って読む「ねぎす」は、い
まは容易に理解できるところである。そこで、その「ねぎ
し(↓ねぎす)」が意識の背景にあって、原漢文に「為」
字があっても、(36)「ねぎ為^つ」と訓まれてきているので
あろう。「為」字があつてヲ格非表出となる(36)「ねぎ為^つ」
には、そのような事情が考えられるのである。

第十章 『古事記』原漢文の構文法と、その訓読法と

他動詞「す」のヲ格賓語のヲ格表出・非表出については、

『古事記』訓読文についていうと、その原漢文との関係が顕著である。小稿第一章においては、個々に、その確認をすることなく述べてきてしまったが、具体的には、第二章・第三章・第四章のヲ格表出用例のすべてが、原漢文において、他動詞「す」に「為」字を用いていた事実をもって確認してきているところである。ヲ格表出用例は、そこまでには見られないのである。

しかし、その原漢文、「為」字を用いていても、ヲ格非表出の用例が見られもしたのである。その事情をいささか追跡しようとしたのが、第二・三・五・六章であり、さらに、それらを再度取り上げて、いまし考察を加えたのが第九章であった。第四章に引いた九用例は、ヲ格表出の顕著な用例であり、第七章に引いた十五用例は、ヲ格非表出の顕著な用例であった。第八章もまた、ヲ格非表出の用例を所属させたが、実は、事情の雑多なヲ格非表出の用例を詰め込んだという反省類りの章である。

『古事記』訓読文については、長く改訓が続けられて、徐々に適正な訓読へと歩み続けているのであろうが、原漢文そのものについては、和化漢文体⁵⁾という、アバウトな説明を

見るとどこまっつているようである。原漢文との関係が見えないまま、そこに与えられる訓読文には、理由が見えないで揺れている部分が確かに存在するのである。『古事記』原漢文の構文は、古代中国語文の構文とどう違うかなど、整理されているのであろうか。そこをどう訓読するか、その訓読法との対応関係など、作成されているのであろうか。

第十一章 原漢文を無視するかに見えた第六章の用例

『古事記』原漢文の中で、他動詞「す」に「為」字を当てた場合と、その「す」を補読させる場合とは、そもそも、どのような違いがあつてのことなのであろうか。そのようなことについて、当代の和化漢文に、何らかの一般的な傾向なりがあつたのであろうか。

第六章の十四用例、第七章の十五用例、第八章の十七用例と、そして、第五章の、ヲ格非表出の三用例とが、ヲ格賓語を受ける他動詞「す」である。ヲ格賓語を受ける他動詞「す」のうち、そのヲ格を表出しない用例が四十九用例となつて、ヲ格を表出する用例二十二用例に対して、二・二倍強となるのである。この事実から、ヲ格賓語のヲ格に

については、これを表出しない他動詞「す」のほうが、むしろ、一般的であったということになるのである。

そのヲ格賓語のヲ格非表出の他動詞「す」のうち、第七章の十五用例と、第八章の十七用例と、第五章の三用例の計三十五用例は、補読した結果の他動詞「す」である。当代人の意識として、それら他動詞「す」は、補読されることを前提とした存在であったかに見えてくるのである。動詞連用形に直接して、もっぱら始動と活用の機能を担っていたとも見えてくるのである。

原漢文において、その他動詞「す」に「為」字を当てて表現し、ヲ格を表出して訓読する第二章の五用例、第三章の五用例、第四章の九用例、第五章の三用例の計二十二用例は、他動詞のヲ格賓語のヲ格表出・非表出史のうえから見たとき、ヲ格表出という新傾向の用例であった、と見ることができることになるであろう。

その「為」字を当てていながら、なお、そこをヲ格非表出のまま訓読してきている第六章の十四用例について、それはどうしてなのか、そう思ったところからの疑問が、小稿である。たまたま出会った素朴な疑問を、恥ずかしげも

なく公開質問とさせていただいた。

注

(1) 格助詞のうち、主格やヲ格については、表出されない場合もあって、その現象を、筆者は、表出・非表出と呼んで取り扱うことにしている。かつて、主格を表す「の」について、『枕草子』の従属節以外の部分に限って、その「の」の表出・非表出の異本間の異同を調査し、「主格辞「の」の表出・非表出について」(『野州國文學』第50号・平成4年6月)として発表したことがある。

(2) 動詞「す」は、実質を有している語を添えることなしには完全な意味を表すことができないとして、山田孝雄『日本文法論』(宝文館・明治四十一年)は、形式用言とした。その実質を有している語を賓語と呼んでいる。小稿では、その賓語をヲ格に位置づけて必須とするのが他動詞「す」であるところから、その賓語をヲ格賓語と呼ぶことにした。

(3) あるいは「みそぎ」の漢熟語としての語構成に関係するか、とも思えた。「褌被」は主述の関係の熟語であり「被褌」はヲ格で返る関係の熟語であるからとも思えたからである。

(4) 拙稿『万葉集』歌の動詞「す」について―十五の観察

視点―」（國學院大學栃木短期大学紀要）第50号）において、他動詞「す」については、動詞連用形に直接して用いられる用例が最も多いことを報告した。

- (5) 例えば『日本古典文学大辞典縮約版』（岩波書店・一九八六年）は、『古事記』の項（西宮一民執筆）の「文体」において、「記序」は漢文体、本文は散文が和化漢文体、韻文（歌謡）が和文体（一字一音の仮名表記をとる）の三種としたうえで、その和化漢文体について、最小単位で返読を反復して行くと、結果的に日本語文として読める文体であり、漢文体が下敷きであるから、文末助字によって視覚的に語気を伝えることもでき、文章も緊縮して能率的であり、古言古意の表記は音仮名を用い、注記を活用して、日本語文が表せるよう工夫してある、と教えてくれる。その、アバウトな認識しかもち合わせていないがゆえの、この小稿である。

- (6) ヲ格賓語のヲ格非表出の三十五用例のうち、第八章の(56)「注す」・(59)「覆奏す」以外、すべて、動詞連用形に直接する他動詞「す」である。そこでその「す」の性質からは、(59)は「かへりこと」の「こと」を避けた動詞連用形であること、(56)は全面的に動詞連用形であること、

が期待される。当初、この原漢文のその部分は、そのように訓読されていたと思いたい。